法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-07

7世紀以前の中国・朝鮮関係史

伊藤, 一彦 / ITO, Kazuhiko

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
87
(号 / Number)
3・4
(開始ページ / Start Page)
163
(終了ページ / End Page)
190
(発行年 / Year)
2020-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00023147

7世紀以前の中国・朝鮮関係史

伊　藤　一　彦

はじめに

近年，北朝鮮の核開発は，東アジアのみならず世界的に関心を集める重要かつ解決困難な問題になっている。北朝鮮はまた核兵器運搬手段としてのミサイル発射実験を頻繁に行い，特に日本ではそれをもって「国難」として政治的に大いに利用されたことがある。

そうした北朝鮮の攻勢を制御するため，2003年に始まった北朝鮮・韓国（「南北朝鮮」あるいは「南北」とも記す）に米国・中国・日本・ロシアを加えた6カ国協議も2007年で中断している。その関連で，中国の役割が論じられることが少なくない。つまり，中国は北朝鮮に対して特別の影響力を有しており，北朝鮮の行動をコントロールしてほしい，そうできるはずだという「期待」が広く持たれているからである。

1950年代初め，朝鮮半島統一を目指して朝鮮戦争を発動した北朝鮮は，韓国を支援する米国の反撃によって滅亡寸前にまで追い込まれた。その時中国が義勇軍を送り込んで形勢を逆転，北朝鮮を救出した。かくして中国と北朝鮮の関係は「血で結ばれた戦闘的友誼」とよばれるようになった。また90年代にはソ連はじめ多くの社会主義国が共産党による一党独裁を放棄し，第2次世界大戦後の世界を支配した冷戦が終結した後も，中国と北朝鮮は数少ない「社会主義国」であり続けている。

こうしたことから，中国と北朝鮮が，通常の国と国との関係を超えた特

別の関係にあることは，中国・北朝鮮自身も認め，外部からもそのように見られてきた。しかし1960年代，中ソ対立と中国の文化大革命の結果，社会主義諸国間でも自国優先の傾向が表面化し中国と北朝鮮の関係にも綻びが目立つようになった。1992年，中国が韓国と国交を樹立したことをきっかけに両国の関係はきわめて悪化し，中国当局者はしばしば両国の関係を「通常の国家間の関係」だと強調することが多くなっている。

にもかかわらず，たとえば北朝鮮の歴代の最高指導者である金（キム）家３代（日成（イルソン）・正日（ジョンイル）・正恩（ジョンウン））の外遊先は，管見では中国とロシア（ソ連）に限られ，しかも圧倒的に中国が多い。またそれを受け入れる中国が，毎回最高指導部（中国共産党政治局常務委員会）のメンバーがこぞって会見し接遇に当たっていることから，中国も北朝鮮最高指導者の訪問を特別に重視していることが分かる。2018年６月，歴史的な米朝首脳会談が実現，朝鮮半島情勢が大きく動き，その前後それまで訪中したことのなかった金正恩朝鮮労働党委員長・朝鮮民主主義人民共和国国務委員長（国家元首）が４回訪中し，中国の最高指導者である習近平中国共産党総書記•国家主席も1回訪朝している。このことからも中国と北朝鮮の関係は，現在も「通常の国家間の関係」以上のものであると言って差し支えない。

今や世界第2の大国•強国となった中国と，身丈に合わない核開発のために国民経済が疲弊しているといわれる北朝鮮ではあるが，両国の関係は，大国が小国を圧迫するといった単純なものではない。中国が，北朝鮮に対する影響力行使を期待されながら，それができないでいる所以である。

中国と朝鮮の関係は一体どういうものであろうか。それを知るためには，両国の関係を，歴史を遡って再検討することが必要である。本稿は，そうした試みの一部をなすものであるが，とりあえず８世紀までで終わっている，本稿で触れられなかったそれ以降の時期については，別の形で発表したいと考えている。なお，本稿では，「朝鮮」の語は，現在の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と大韓民国（韓国）の両者を含む，朝鮮半島およびその周辺の地域を指して用いるが，誤解を招く恐れのない場合は，北朝鮮

を指すこともある。

1．古朝鮮（コジョソン）

BC5000年，中国，朝鮮はともに新石器時代だったが，両者に似通った遺跡，遺物が存在し，この頃すでに交流があったといわれる[1)]。

朝鮮の古代国家「古朝鮮（コジョソン）」は，後の「朝鮮朝（チョソン）」（1392年～1910年。日本では「李氏朝鮮」「李朝」と呼ばれることが多かったが，近年韓国で，それは植民地時代に日本が押し付けた呼称であるとして，「朝鮮王朝」「朝鮮朝」あるいは「朝鮮」の使用が推奨され，その影響が日本にも及んでいる）と区別するために，後世に作られた呼称である[2)]。ただし古朝鮮については，朝鮮とそれ以外で理解する内容に大きな隔たりがある。古朝鮮は時代順に檀君朝鮮（タングン），箕子朝鮮（キジャ），衛満朝鮮（ウィマン）（日本では「衛氏朝鮮」といわれることが多い）を含むとされるが，最初の檀君朝鮮は，朝鮮以外では，資料的根拠に欠ける神話・伝説とされている。しかし朝鮮では南北を問わず，朝鮮民族の始祖神，檀君が開いた檀君朝鮮は史実を反映したものとされ，北朝鮮は檀君の遺骨の科学的鑑定により，その存在が実証されたとして，1994年平壌（ピョンヤン）郊外に高さ22メートルの巨大な檀君陵を建設，国宝に指定した。韓国では1960年まで，檀君朝鮮建国のBC2333年を元年とする檀君紀元が用いられていた。朝鮮「半万年の歴史」というのは，それに由来している。10月３日は檀君が建国した日で，韓国では「開天節（ケチョンチョル）」という祝日になっている。ちなみに，北朝鮮の建国記念日は朝鮮民主主義人民共和国発足の９月９日，「伝説」に基づく建国記念日は，世界で韓国と日本のみだと言われる[3)]。

次の箕子朝鮮は，殷の滅亡後，周武王により朝鮮半島西北部（現在の平壌付近）に封じられた殷王紂の叔父箕子胥余がBC1122年に開いた王朝として，中国ではその存在は確実視されている。朝鮮でも，儒教が盛んだった朝鮮朝までは，箕子は朝鮮に文明をもたらした聖人として崇拝され，箕子朝鮮は実在したとされていたが，20世紀以降その存在に疑問が呈されるよ

うになった。高麗王粛宗(コリョ スクジョン)が1102年に現在の平壌(ピョンヤン)，牡丹峰(モランボン)の乙密台(ウルミルデ)に建てた「箕子陵」は，1959年「封建的支配階級の事大主義の産物であり，朝鮮民族への侮辱」とする金日成(キムイルソン)の命令で破壊された。現在北朝鮮では「箕子東移（来）説」は，「BC 3 世紀末から 2 世紀初めに中国の封建的歴史家が，漢の古朝鮮侵略政策を合理化するためにでっちあげたもの」と全否定されている[4)]。韓国，そして日本でも「箕子朝鮮」の実在は疑問視されている[5)]。仮に朝鮮のこの認識が正しかったとしても，中国の混乱期に多くの人々が古朝鮮の地域に流民として移住したことは事実である。

次の衛満朝鮮は，中朝ともに実在を認める，朝鮮の初めての国家である。『史記』等，中国の史書によれば，燕王盧綰(ろわん)が漢に離反して鎮圧されたため，燕の武将衛満が箕子朝鮮に亡命した。その後衛満は，燕・斉・趙等からの亡命者を糾合して箕子朝鮮王箕準(キジュン)を追放，BC194年に衛満朝鮮を建国した。都は箕子朝鮮と同じく，王険城(ワンゴムソン)（現在の平壌）。『史記』巻一一五／朝鮮列伝によれば，衛満は漢の遼東太守（遼東郡の長官。遼東郡は，遼河以東の現在の遼寧省とほぼ一致する地域に置かれた郡）に漢の「外臣」（中国の郡国制内の臣下「内臣」に対し，郡国制外の従属国（「藩属」）の君長及びその臣下）と認められ，漢に朝貢した。中国皇帝が周辺諸国の国王等君長を正式な支配者と認定し，後者が前者に忠誠を誓うべく使者を定期的に派遣し貢物を贈る「冊封・朝貢関係」の中国・朝鮮間での始まりである[6)]。しかし衛満は，漢を後ろ盾にして周辺諸小国を併呑して勢力を拡大していき，後には漢への通貢を中止し，漢と対立するようになる。

中国では，檀君朝鮮は存在せず，箕子朝鮮，衛満朝鮮は中国の藩属国・地方政権であって，朝鮮史に含めるべきではないという主張さえあり[7)]，中国近年の総合的中朝関係史である『中朝関係通史』の章・節名に「古朝鮮」の文言は見あたらない。これに対し北朝鮮においては，衛満の出自が中国であることを否認し，衛満朝鮮が朝鮮土着の勢力による国家であるとする説が定説化している。

かように中国と北朝鮮（そして韓国も）の「古朝鮮」に対する認識には大きな隔たりがある[8)]。

衛満朝鮮に対する北朝鮮の理解が以前とは異なっていることに対し，韓国のある歴史家は，朝鮮朝について，朱子学が指導理念となったため，儒教文化圏の辺境という意識から歴史を認識するようになり,「慕華思想」に浸り切った「事大史観[9)]」に陥ったとする。そしてそれが，朝鮮は自力では発展できない証として日本の朝鮮支配に利用されたという[10)]。

つまり，朝鮮の歴史認識は，朝鮮は自力では発展できない遅れた国・民族であり，中国の援助・保護に頼ってきたという「事大主義」が朝鮮人自身にあり，近代，日本が朝鮮を支配するために,「植民地史観」を持ち込んでそれを増幅した。それゆえそうした「誤った」朝鮮史理解を清算して自民族の主体的な歴史を回復しなければならないといようになった。逆に中国はそれを,「民族主義史観」と批判するのである。

２．漢四郡

BC128年，現在の中国東北地方から北朝鮮にかけての地域に位置した濊（イエ）（東夷とされる）の君主南閭（ナムヨ）が, 従来服属していた衛満朝鮮に叛き漢に投降したことを契機に，漢武帝（在位BC141年－BC87年）が朝鮮半島東北部，現在の咸鏡南道（ハムギョンナムド）•江原道（カンウォンド）等日本海に面した地域に蒼（ツァン）（滄）海郡（ヘグン）を設置した。蒼海郡は２年で廃止されるが，漢の朝鮮進出の先駆けになった。ただし，朝鮮では，その存在はあまり問題にされていない。

その後，衛満朝鮮が漢との繋がりを利用して勢力を強め，対漢関係を独占するため，周辺小国に侵攻したり，漢への朝貢を妨げたりした。漢は次第に衛満朝鮮を自らの権威に対する挑戦者とみなすようになり，対外積極策をとる武帝は，BC111年の南越国に続きBC108年衛満朝鮮を滅ぼした。

衛満朝鮮滅亡前後，現在の中国東北地方の夫余（プヨ）・高句麗（コグリョ），北朝鮮北東部の沃沮（オクチョ），東部の東濊（トンイエ），韓国南部の韓（ハン）等の在地勢力が成長していたが，それ

らは農耕・牧畜・狩猟・漁業等を営んで生産物を中国に輸出してもいた。

漢武帝はBC108年，これらの諸勢力が居住する地域を支配するため「漢四郡」を置いた。衛満朝鮮の故地である現在の平壌(ピョンヤン)周辺に楽浪郡(ナンナングン)，その南に真番郡(チンボングン)，西に臨屯郡(イムドゥングン)，翌BC107年北に玄菟郡(ヒョンドグン)である。「郡」とは，古代中国の地方行政制度「郡県制」の上位組織であり，朝廷＝中央政府が派遣する太守の支配下にあった。「漢四郡」は，漢の植民地であるか，それとも漢本国の一部であるかという点に争いがあるが，いずれにせよ漢に隷属した。ただしBC82年，真番・臨屯両郡は廃止されて楽浪郡に編入，玄菟郡は一部が楽浪郡に編入された以外は，現在の吉林省・遼寧省あたりに移動した。これ以後，朝鮮半島に残ったのは楽浪郡のみとなった。周辺民族の圧迫による結果とされる。楽浪郡治は衛満朝鮮の都王険城(ワンゴムソン)，平壌（現在の同市のやや東北）に置かれ，以後，中国の朝鮮半島支配の拠点となった。

後漢末，遼東太守公孫度が勢力を拡大してほとんど独立状態になり，楽浪郡の南部を切り離し，新たに支配下に置いた地域を併せてAD204年（以下，ADは省略）帯方郡(テバングン)を設けた。韓(ハン)・濊(イエ)等諸族の攻勢に対処するためである。公孫氏は237年燕として自立したが，翌238年魏によって滅ぼされ，楽浪・帯方両郡は魏，その後は晋の直轄支配下に入った。

楽浪郡には，中国から官吏のみならず，多くの商人や農民が移住し，中原の文化を朝鮮にもたらした。都である平壌からは多数の遺跡・遺物が出土している。この間帯方郡は，南方の韓・濊等諸族や東南海上の倭国を管轄し，これら地域の中国に対する玄関口の役割を果たした。たとえば238年，邪馬台国女王卑弥呼が派遣してきた朝貢使難升米(なしめ)は，帯方郡の官吏に伴われて後漢の都洛陽を訪れ，240年には帯方太守弓遵が使者を派遣，魏の詔書，印綬を卑弥呼に授けた。246年，魏が帯方郡管轄の辰韓８カ国を楽浪郡に移管しようとした際，韓族が反抗し，楽浪・帯方両郡が出兵してこれを鎮圧，韓諸国を制圧した。弓遵はこの戦闘で戦死した。313年，楽浪・帯方両郡は高句麗に滅ぼされ，朝鮮における中国王朝の郡県支配は終了した。

平壌の遺跡・遺物は，はじめ植民地期に日本人学者により発掘されたこ

ともあり，北朝鮮では，それは中国支配の証ではなく，朝鮮系の「楽浪国」が中国から奪取したものであり，「楽浪郡」を含む，漢武帝が設置した漢四郡の位置は朝鮮半島外の現在の中国東北地方だというのが定説になっており，韓国でも学界の主流ではないものの，それに同調する研究者もいる。

3．三韓（サマン）

これまで述べてきたことは，ほぼ朝鮮半島北部以北の状況であり，南部はこれとは異なる。

『史記』や『漢書』によれば，BC 3 ～ 2 世紀古朝鮮の南に韓（ハン）と呼ばれる朝鮮半島南部の諸部族の連合体，辰（チン）国があり，現在のソウルを貫いて黄海（ファンヘ）に注ぐ漢江（ハンガン）の南に都を置いたという。

その後BC 1 世紀からAD 4 世紀にかけて，東から西に辰韓（チナン）・弁韓（ピョナン）・馬韓（マハン）の「三韓（サマン）」（「三韓」は後の，百済（ペクチェ）・新羅（シルラ）・高句麗（コグリョ）の 3 国を指すこともある）が鼎立するようになるが，それらもまた小国の集合体であった。なお馬韓は，衛満に倒された箕子朝鮮の王準（ジュン）が南に逃れ（馬）韓王となったという記述もある。

中国王朝の支配は朝鮮半島北部ほど強く及んではいなかったが，中には楽浪・帯方郡を通じて「帰義侯」「中郎将」といった官位を授けられ，中国の間接支配を受け入れる君長もあった。先述の漢による衛満朝鮮への攻撃は，衛満朝鮮が辰国や三韓の漢に対する朝貢を阻止したことが一因とされる。弁韓は多くの鉄を生産し，中国や倭に輸出した。

馬韓は 4 世紀頃，構成諸国中で強大化した伯済（ペクチェ）国を母体として，現在のソウルを中心に建国した百済（ペクチェ）に，辰韓は同じく斯盧（サロ）国を経て新羅（シルラ）に代わった。弁韓は 3 世紀に伽耶（カヤ）（加羅（カラ））諸国と呼ばれる小国家群となり，初期は金官（クムグァン）（金海（キメ）），5 世紀後半には大伽耶（テガヤ）（高霊（コリョン））が盟主的立場に立った。東アジアの海上交通の要衝という地理的特徴を生かし，倭や中国大陸とも交流し，479年には「加羅国王荷知（ハジ）」が中国南朝の斉に朝貢し，「輔国将軍・加

羅国王」に冊封された。しかし新羅と百済という両大国の狭間にあって翻弄される伽耶諸国は562年新羅に滅ぼされ，朝鮮半島は，高句麗・百済・新羅の鼎立する三国時代となる[11]。

4．三国時代

(1) 高句麗（コグリョ）

漢四郡のうち，真番・臨屯両郡が設置後わずか26年程で廃止され，玄菟郡も同時期に朝鮮半島外に移転した背景には，高句麗の勃興があり，313年楽浪郡・帯方郡も高句麗により滅ぼされた。

高句麗族は，以前は扶余（プヨ）族の末裔とされたが，近年は貊（イェ）（狛）族の系統に属すといわれる。中国ではまた，殷と同系とする見方もある[12]。『通史』は，「中国少数族高句麗（卒本夫余（チョルポンプヨ））」と記している[13]。高句麗の名の初出は，BC107年，漢が高句麗族管理のため，現在の中国吉林省集安市に置いた玄菟郡の首県，高句驪県[14]とされる。高句麗族はしかし，漢の郡県支配に反抗して高句驪県城を攻撃するなどしたため，BC75年漢はやむなく玄菟郡を北西に移動させた結果，高句驪県も現在の遼寧省新賓満族自治県に移った。つまり高句麗の発展により，漢は支配地域の後退を余儀なくされたのである。

朝鮮の史書『三国史記』は高句麗国の建国をBC37年とするが，すでにBC107年からBC75年の間に高句麗は興起していたようだ[15]。その領域は現在の中国遼寧省の鴨緑江（アムノッカン）と渾河にはさまれた地域で，当初卒本（チョルポン）（現，遼寧省桓仁満族自治県）に都を置いた。

前漢を倒した王莽が建てた「新」は，高句麗王を高句麗侯に格下げし，AD12年には匈奴討伐のための出兵を拒否する高句麗を攻撃，侯騶（チュ）を殺害し高句麗を「下句麗（ハグリョ）」と改名させ侮辱した。これが高句麗や他の異民族の反乱を引き起こしたことが一因となり，新の滅亡を招いた。新を倒し漢が復

活する（後漢）と，高句麗は32年これに朝貢，高句麗王の称号を回復した。

これに前後して高句麗は勢力を拡大，22年玄菟郡支配下の扶余（ブヨ），36年同蓋馬（ケマ）を併呑，中原を支配すべく49年には現在の中国山西省太原まで侵攻したという。実際には，高句麗の属国である鮮卑が高句麗の命を受け，高句麗の名で侵攻したもので，その後鮮卑は後漢に懐柔されて高句麗と敵対するようになった[16]。いずれにせよ高句麗の勢力拡大は事実であり，2世紀には周辺諸民族の盟主となっていた。

105年高句麗が後漢の遼東郡（郡治（郡都）は現在の遼寧省遼陽市）を攻撃するなどしたため，玄菟郡は郡治である高句驪県をさらに西方（現在の遼寧省撫順市）に移動させた。2 世紀末中国は分裂状態に陥り，遼東地方で巨大な勢力を持つようになった公孫氏による干渉もあって高句麗は分裂し，209年頃都を鴨緑江（アムノッカン）中流北岸のかつての高句驪県城，国内城（クンネソン）（丸都城（ワンドソン）ともいう。現，吉林省集安市）に移した。高句麗は後漢滅亡（220年）後，当初は公孫氏にならい，三国に分裂した中の北部の魏（220年－265年）に服属する一方，「遠交近攻」を目的に密かに東南部の呉（222年－280年）とも通じた。233年呉王孫権（229年，皇帝を称した）が，魏を挟撃するため将兵1万人を伴う使節団を海路遼東に派遣し，公孫淵を「遼東太守・燕王」等に封じた。しかし，魏を恐れる公孫淵は呉の使節を斬ったため，使節団員数十人が高句麗に逃れ，第11代東川王（トンチョンワン）に高句麗の遼東領有を認める呉王の詔勅を伝えた。高句麗は呉の使節団を海路，呉に送還した。その際，高句麗が呉に臣従を誓う文書と貢物を奉呈，翌年呉が使節を高句麗に派遣して宮（東川王のこと）を単于（ぜんう）（匈奴の君主の称号）に任じた（以上『三国志／呉書／呉主伝第二』）。かくて高句麗は一時呉と同盟を結んだ。この間，高句麗・遼東と呉は東海（現在の黄海と東海（東シナ海）を含む）を船で行き来したが，これは後の南中国への海上航路の先駆けとなった[17]。

しかし遼東方面での魏の勢力は絶大で，高句麗もまた公孫氏の後を追った。236年，東川王は呉王の使節を斬ってその首を魏に送り，呉と断絶，魏に接近した。238年には魏の燕（公孫氏）攻撃に協力して，将兵1000人を

派遣した。しかし同年魏が燕を滅ぼし，玄兎郡に高句麗県等を設置するとともに楽浪・帯方両郡を復興すると，高句麗との関係が緊張した。242年高句麗の東川王（トンチョンワン）は遼東の西安平県（現在の遼寧省丹東付近）を攻撃し，それに対し魏は244年と翌245年，将軍毌丘倹（かんきゅうけん）による2回にわたる高句麗遠征を行い，大勝，都の丸都城を占領したが，高句麗は屈服しなかった。魏はこの時，現在の北朝鮮東北部から中国東北地方の吉林省琿春あたりまで侵攻し，沃沮（ヨクチョ）や東濊（トンイェ）等の種族を支配下に置いた。この方面の初めてのまとまった記録『魏志東夷伝』（正確には『三国志／魏書／東夷伝』）はこうして作成された[18)]。

265年に魏に代わった晋（265年－316年）が呉を滅ぼし（280年）て魏・呉・蜀に分裂していた三国時代を終わらせ，一時的に中国統一を実現した。しかし304年には五胡十六国という異民族支配と分裂の時代が始まり，南北朝時代を経て589年に隋が統一するまで続く。

中国の混乱に乗じ，高句麗は勢力を強め，遼東，そして朝鮮半島南部への進出を図り，313年楽浪郡を，前後して玄兎郡（中心は現在の遼寧省撫順）・帯方郡（中心は現在のソウルを貫く漢江（ハンガン）南部か）・遼東郡も滅ぼし，一度は遼東地方と朝鮮半島から中国の勢力を排除した。平州刺史（遼東・昌黎・玄菟・帯方・楽浪５郡を管轄する平州の長官），東夷校尉（遼東地方の最高軍事長官。後，高句麗国王に付与される称号となる）の漢人崔毖（さいひ）は多数の流民を糾合して自立しようとしたが，遼西を本拠とし，鮮卑大単于（だいぜんう）を称する慕容廆（ぼよう・かい）の力を恐れ，319年鮮卑の他部族や高句麗等と結んで慕容氏に挑戦したが返り討ちにされた。その結果崔毖は家族・将兵とともに高句麗に亡命した。朝鮮の崔（チェ）氏の始祖であり，高句麗の発展に尽くしたといわれる。

慕容廆の子，慕容皝（こう）は337年前燕（－370年）を建国し，341年東晋（317年－420年。晋は匈奴の漢（後の前趙）に滅ぼされ，317年江南に移動して再建された。都は建康（現，南京）。南遷前を西晋，後を東晋として区別する）から燕王の地位を認められ，352年その子慕容儁（しゅん）が皇帝に即位して東晋

からの自立を果たした。342年慕容儁は親征して高句麗を攻撃，都の丸都城を徹底的に破壊し，故国原（コクグォン）王の父美川（ミチョン）王の墓を暴いて屍を奪い，王母を捕らえ，財宝や高句麗人5万人余を奴隷として連行した。高句麗が336年と343年に東晋に朝貢したのは，前燕の脅威に備えたものだったであろう[19]。しかし結局，故国原王は343年前燕に弟を派遣，臣を称して恭順の意を示す他なかった。また355年には高句麗に亡命していた宋晃を前燕に送還してようやく王母を取り戻すことができた。その際，故国原王は慕容儁から「征東将軍・営州刺史・楽浪公・高句麗王」に封じられたが，これは中国皇帝が朝鮮国王を初めて冊封した事例である。なお宋晃は慕容皝に反逆して失敗，高句麗に亡命した前燕の将軍たちの一人で，高句麗の発展に貢献した。慕容儁は宋晃の罪を赦し，高官に復帰させた。

五胡の一つである氐（てい）族の前秦（351年－394年）が370年前燕を滅ぼし，376年には華北を統一，遼東にまで勢力を拡大すると，高句麗（新羅・百済も）は引き続き前秦の冊封を受けた。4 世紀後半372年，前秦からは仏教が伝わり，律令が制定され，さらに儒学教育のための太学（たいがく）が設けられるなど，政治や文化面で積極的に中国の影響を受け入れた。なお道教も，不老長寿の神仙思想とともに 6 世紀以降高句麗の支配層のあいだに広まった[20]。

高句麗第19代王好太王（ホデワン）（広開土大王（クァンゲトテワン），在位391年－412年）は，即位した391年を元年とする初の朝鮮年号「永楽（ヨンナク）」を創設した。朝鮮では従来中国の朝貢国であることを認め，中国皇帝は天帝の子（天子）として天下（世界）を支配する命を受け，その支配は空間のみならず時間にも及ぶことを表象する中国年号の使用を受け入れてきた。独自の年号を建るということは，中国皇帝の権威に対する挑戦であり，高句麗の中国からの独立宣言を意味した――その後，高麗（コリョ）までの朝鮮の各王朝は，時に独自の年号を定めることがあったが，それは限定的だった――。前秦に代わる後燕（384年－407年または409年）の皇帝慕容宝（ぼようほう）（在位396年－398年）もまた「句麗王」である好太王を「遼東・帯方二国王」に封じたが，これは後燕側の一方的行為で，高句麗側の関知する所ではなかったかも知れない[21]。好太王は，広

開土大王という諱(いみな)が示すように高句麗の領土を四方に拡大した。高句麗は，その勢力強化に対して警戒を募らせた後燕との間で399年以来何度か干戈を交えたが，最終的に勝利をおさめ，5世紀初めには遼東半島全域を支配するに至る。

漢人将軍馮跋(ふうばつ)が後燕を滅ぼして開いた北燕（407年－436年）は，都を黄龍府（龍城，現在の遼寧省朝陽市）に置き，慕容宝の養子で高句麗王族出身の慕容雲を初代天王（皇帝，在位407年－409年）に擁立した。慕容雲は旧姓に復して高雲(コウン)を名乗ったが，好太王はただちに使者を派遣して高雲を高句麗の宗族待遇とし，高句麗と北燕との関係は改善された。好太王はまた，後燕•北燕と同じ鮮卑の慕容氏が現在の中国山東省で建てた南燕（398年－410年）とも関係をもち，西部辺境の安定を図った。『通史』は，高句麗は中国の混乱に乗じて中国東方の4郡を奪い，また北燕高雲支配下の人民を高句麗国内に編入した。これは高句麗による中原支配のための2回目の軍事行動である。しかし魏が強大化したため，それを放棄し，南進政策に転じざるを得なかったとする[22)]。

好太王の後を継いだ長寿王(チャンスワン)（在位413年－491年）の時代，現在の朝鮮半島の四分の三，中国東北地方（「満洲」）の大半，内モンゴルとシベリアの一部を含む最大版図を実現した。また独自年号「延寿(ヨンス)」を使用し，北魏（386年－534年。鮮卑族の拓跋氏が建てた国。439年華北を統一し，南北朝時代の幕を開ける）の圧迫に抗するとともに，朝鮮半島南部への勢力拡大のため427年に平壌(ピョンヤン)に遷都した。これは現在の平壌から数キロ東北に位置しており，古朝鮮の王険城，また楽浪郡治として400年余も中国による朝鮮半島北支配の拠点であった。高句麗は313年以来，百済による占拠時期（371年－396年）を除き，平壌を支配していた。

平壌遷都前後，中国は華北の分裂状態が収束に向かい，439年北魏による華北統一で，南部の宋（420年－479年。東晋の禅譲で建国，劉宋・南宋ともいう。都は建康（現，南京））と並立する南北朝時代を迎えた。こうした歴史の転換期にあって高句麗は中国の各王朝と融通無碍な関係を取り結

び，東アジアにおける存在感を強めていった。

長寿王は413年，即位後直ちに暫く途絶えていた東晋に使節を派遣し，前燕・後燕からと同様「征東将軍・楽浪公・高句麗王」等の称号を得た。こうした動向は，高句麗が北方の北魏との関係が悪いため，自ら南方の王朝に冊封を求めた結果といわれる[23]。またこの時，高句麗の使節は捕虜とした倭人を伴ったが，高句麗の威勢が倭国にまで及んでいることを誇示するためであった[24]。また東晋に代わる宋の武帝により420年「征東大将軍」に封じられた。東晋の「征東将軍」からの昇格であり，前燕の「征東大将軍」への復帰である。さらには463年「車騎大将軍」，480年宋に代わった斉（479年－502年）により「驃騎大将軍」となった（漢代は「驃騎大将軍」が「車騎大将軍」より上位だったが，両者が同等の時代もあり，この場合の上下関係は不明）。その後の南朝の梁（502年－557年）・陳（557年－589年）も高句麗王を冊封している[25]。

高句麗はこのように南朝の各王朝と冊封関係を維持したが，地理的に近く，それ故高句麗に対してより大きな影響力を持つ北朝とも関係を保った。432年北燕は華北で勢力を拡大する鮮卑族の北魏に圧迫され，支配下の遼東・楽浪・帯方・玄菟等 6 郡は北魏に投降した。そのため435年第 3 代天王馮弘は南朝の宋の庇護を頼り，燕王に封じられた。同年高句麗長寿王（チャンスワン）は北魏から「征東将軍・遼東郡開国公・高句麗王」等に封じられたが，高句麗の北魏との関係は宋との関係ほど強くはなかった。翌436年夏，北魏は北燕の都，和竜（現，遼寧省錦州）を攻撃，馮弘は支援に駆けつけた高句麗軍に守られて高句麗に亡命し北燕は滅亡した。そのため一時的に高句麗と北魏の関係は悪化した。しかし高句麗での馮弘は宗主の地位を要求するなどして長寿王（チャンスワン）との関係が悪化，438年宋は馮弘を迎えるため王白駒麾下の水軍七千人を高句麗の遼東半島に派遣したが，高句麗は馮弘一家を殺害，宋軍を武装解除して本国に強制送還した。これにより高句麗と北魏の関係は改善され，465年宋に内紛が生じて以後，高句麗は宋より北魏との関係を強化していく。北魏以後，北朝の東魏（534年－550年），北斉（550年－577

年），北周（556年－581年）も高句麗王に驃騎大将軍，車騎大将軍，大将軍といった将軍号を送り，冊封関係を維持した。

(2) 百済（ペクチェ）

百済は，313年高句麗に滅ぼされた帯方郡の人々や，混乱する中国北部から流入した漢人たちを包摂して4世紀中頃までに，漢山（ハンサン）（現，ソウル）を王都として建国された。ただし12世紀に成立した朝鮮の史書『三国史記（サムグクサギ）』は，高句麗の開祖朱蒙（チュモン）の第３子温祚（オンジョ）が南下して，BC18年漢江（ハンガン）南岸に建国したとする。『通史』も，「中国少数族高句麗（卒本夫余（チョルポンプヨ））が分かれて馬韓（マハン）地区に至って建国し，馬韓人民と融合した」と記している[27]。同書はまた，百済は建国直後楽浪郡と修好したが，その勢力が急速に発展したため，関係が緊張したこともあった。その後漢・魏・晋の羈縻政策に満足して友好関係を維持したとする。

百済は371年平壌で高句麗と戦って故国原（コクグォン）王を戦死させ，翌年東晋に朝貢して近肖古（クンチョゴ）王（在位346年－375年）が「鎮東将軍・楽浪太守」の称号を受けた。以後百済は高句麗と対抗するため，中国南朝の宋・斉・梁各王朝に朝貢し，南朝もまた北朝に対抗するため百済を優遇，王の称号も「鎮東大将軍・百済王」等と累進した。384年枕流（チムニュ）王（在位384年－385年）が東晋により帯方郡王に冊封された。

百済は475年高句麗により一時滅ぼされた。その後百済は南遷して復興，東城（トンソン）王（在位479年－501年）は斉・梁に入貢し，「征東大将軍・百済王」に昇格した（先の「鎮東大将軍」を含む「四鎮大将軍」より，「征東大将軍」を含む「四征大将軍」が上位）。次の武寧（ムニョン）王（在位502年－523年）も521年梁に入貢したが，この時新羅使節を伴い，高句麗に対する百済•新羅の同盟関係を誇示した。なお蓋鹵（ケル）王（在位455年－475年）と東城王は宋・斉に対し，臣下への叙爵を願い出て認められている。これは倭にもあったことであるが，中国皇帝の権威を借りて，国王と臣下の身分関係を確定するためだった[28]。

百済は中国南朝から文化面で受けた影響も大きかった。384年東晋から伝来した仏教が次第に隆盛となり，各地に寺院が建設された他，儒教等，広範な文化を受け入れ，百済文化として発展させた。百済は対高句麗関係を意識して倭とも結んだが，その結果，百済は中国文化を倭に中継する役割も果たした。ただし『日本書紀』や『古事記』が記す，王仁（ワンイン）による「論語」「千字文」の伝来は史実としては確認できていない。

百済の北朝との関係は，南朝に比べるとかなり弱かった。472年に蓋鹵王が初めて北朝の北魏に使節を派遣して高句麗討伐の出兵を要請した。北魏孝文帝（在位471年－499年）は使者を百済に派遣したものの，出兵要請には応えなかった。その後百済は567年北斉に朝貢するまで北朝との通交は途絶えた。570年威徳王（ウィドクワン）（在位554年－598年）は北斉後主（在位565年－577年）から「驃騎大将軍・帯方郡公・百済王」等に封じられ，577年，578年には北周に連続して遣使・朝貢した。百済のこうした頻繁な外交活動は，北朝に高句麗を挟撃させることをねらいとしていた[29]。

(3) 新羅（シルラ）

新羅は先述したように，三韓のうちの辰韓（チナン）12国中の斯盧（サロ）が発展したものである。辰韓は秦韓（チナン）とも表記され，中国の史書は，秦始皇帝による労役から逃亡した秦人が集住したという話を紹介している[30]。

新羅は当初高句麗に従属し，377年高句麗使節に伴われて，華北の大部分を支配する前秦に朝貢したのが国際舞台へのデビューである[31]。前秦には382年にも朝貢し，その後華北を統一した鮮卑族の北魏に502年，508年にも朝貢使節を送った。しかし新羅が，提携先を高句麗から百済に乗り換えるようになり，521年には百済とともに南朝の梁に朝貢している。その時百済の武寧王（ムニョン）（在位501年－523年）は「寧東大将軍・百済王」の称号を得たが，新羅の法興王（ポップン）（在位514年－540年）にはそうした沙汰はなかった。新羅が当時いかに軽視されていたのかが分かる。法興王は527年強い反対を押し切って仏教公認を断行したが，仏教の盛んな梁との関係を重視した結

果といわれる[32]。ただし新羅は国力の充実により，536年には独自の年号「建元（コンウォン）」を創始し，その後の各王も断続的に７つの年号を建てたが，650年以降は唐の年号を用いるようになる。

新羅は北朝最後の北斉に３回（564年，565年，572年），南朝最後の陳に４回（568年，570年，571年，578年），朝貢使節を派遣した[33]。朝鮮半島の東南部に位置するため，高句麗や百済とくらべ中国との交流が困難だった新羅がようやくそうした苦境を打開し始めたといえよう。565年真興（チヌン）王（在位540年－576年）が北斉武成帝から「使持節・東夷校尉・楽浪公・新羅王」の称号を受けた。これが，中国の新羅に対する初めての冊封である。ただし，南北朝期の新羅王冊封の記録はこれだけであるため，新羅が高句麗・百済とならぶ存在であることを中国側が認めた[34]と言い切れるか，疑問が残る。

この間，梁・北斉からも新羅に使節が派遣され，その際，仏舎利や経論がもたらされた。高句麗や百済に抗して新羅の勢威を拡大した真興王や，次代の真平（チンピョン）王（在位579年－632年）は仏教を積極的に奨励したが，中国南朝の陳にわたった円光（ウォングァン）と唐に渡った慈蔵（チャジャン）は，新羅における仏教の普及のみならず，国政に参与し,隋への対高句麗出兵要請，唐衣冠制度の導入の提言等，重要な役割を果たした。

５．隋・唐と朝鮮３国

(1) 隋と朝鮮３国

後漢滅亡（220年）後の中国の分裂時代，高句麗は南朝•北朝双方に朝貢し，その対立関係を自国に利するよう努め，百済や新羅に対する優位を維持した。ただし先述したように５世紀後半には百済が，６世紀後半には後発の新羅も南北朝双方に朝貢するようになり，朝鮮3国と中国との関係における高句麗の優位が揺らいだ。６世紀前半まで，新羅は百済と連合して

高句麗に対抗してきたが，後半になると百済との連合を解消，３国相争う状況となった。その中で新羅が台頭，７世紀前半には高句麗と百済が共同で新羅に当たるようになるが，新羅と百済は中国との関係を強化して，朝鮮半島における立場を有利なものにしようとした。

その中国で，北周の摂政楊堅が静帝から禅譲を受け，581年隋を建国，文帝（在位581年－604年）となった。百済と高句麗は同年直ちに朝貢，百済威徳王（在位554年－598年）は「上開府儀同三司・帯方郡公・百済王」，高句麗平原王（在位559年－590年）は「大将軍・遼東郡公・高麗王」に封じられた。「大将軍」は正三品,「上開府儀同三司」は従三品であるから，隋は百済より高句麗を重視したことになる[35]。ただし高句麗も百済も，南朝陳に対する朝貢を継続し, 高句麗は585年隋との関係を絶った。両国とも隋をさほど重視していなかったようだ[36]。

589年隋が南朝陳を滅ぼして長きにわたる分裂と混乱に終止符を打ち，中国の統一が実現した。百済はこの時済州島に漂着した隋の軍船を丁重に遇し，その帰国にあたっては使節を同行させて祝意を表すとともに朝貢した。高句麗は翌590年, 新羅はやや出遅れたが594年, それぞれ隋に朝貢し，新羅真平王（在位579年－632年）は「上開府・楽浪郡公・新羅王」に冊封された。朝鮮３国が中国情勢を注視し, その変化に迅速に対応したこと，逆に隋も朝鮮諸国の動向に敏感だったことが分かる。

しかし高句麗は，天下統一の勢いに乗る隋が遼水（現，遼河）をはさんで隣接することを警戒せざるを得ず，軍備増強に努めた。隋文帝は高句麗平原王に，その面従腹背を責め,「遼水は長江より広いか？高句麗人は陳より多いか？」と高飛車に問いかけ，武力行使を前面に押し出して臣従を強要する書簡を送った。これに対し平原王は陳謝を表明, 文帝は590年後継の嬰陽王（在位590年－618年）を「上開府儀同三司•遼東郡公」に冊封した。百済王と同じ「上開府儀同三司」は降格であり,「高麗王」も取り消された。もっともその後嬰陽王が恭順の意を表し，王号の回復を請うたため，それが認められた[37]。

文帝や，その後継者煬帝（在位604年－618年）は周辺諸国に服従を強いて朝貢体制の強化をはかり，突厥（581年－602年），占城（605年。現在のベトナム中南部），吐谷渾（608年。現在の青海省），流求（610年。現在の台湾あるいは沖縄）などに出兵して版図を拡大した。こうした隋の高圧姿勢に脅威を感じた高句麗嬰陽王は軍事力を強化するとともに，北方の異民族，突厥や契丹，靺鞨等との連携を強めた。

〈第１次隋•高句麗戦争〉596年文帝は高句麗に，北部国境の侵犯をやめ，突厥との同盟を解消して隋に服従を誓うよう求めた。これに反発した高句麗が598年靺鞨とともに遼西の営州（現在の遼寧省朝陽）を攻撃したことを契機に，水陸30万の隋軍が高句麗に派遣された。しかし兵糧不足や疫病，そして暴風のため将兵の８，９割が戦没，高句麗嬰陽王の自らを「糞土臣」と卑下する謝罪もあって，隋軍は撤退した。とはいえ以後80年間，東アジアは大動乱に襲われた[38)]。

この年百済威徳王（在位554年－598年）は，隋に使臣を送り，高句麗に対して戦端を開くことを期待し，道案内を買って出た。文帝は，事態がすでに収束したことを伝え，百済使節を厚遇した。これを知った高句麗は百済の辺境を侵して報復した。高句麗の脅威にさらされる百済と新羅は，相次いで隋に高句麗出兵を要請した[39)]。

〈第２次隋・高句麗戦争〉607年百済武王（在位600年－641年）は隋煬帝に高句麗討伐を要請，煬帝はこれを認め，高句麗情勢の探索を命じた。ただし『隋書』は，武王は高句麗とも通じており，隋の実情を探っていたと記す[40)]。朝鮮半島諸国に対する隋の疑心暗鬼ぶりがうかがえる記述である。611年煬帝の高句麗親征計画を知った武王は開戦時期を尋ねた。これはつまるところ，対高句麗戦への協力申し入れということだろう。煬帝は大いに喜び，手厚く褒美を与えただけでなく，百済に人を送り高句麗戦に関して意見交換を行った[41)]。

一方，新羅真平王は602年，604年，608年，611年に隋に朝貢使節を派遣し，後の２回には高句麗への出兵を要請している[42)]。ただし『隋書』に

それは記載されていない。新羅はまだ軽視されていたのであろうか。

高句麗は謝罪した後も突厥との繋がりを絶たず，611年煬帝が塞北を巡幸した際，突厥支配地の榆林（現在の内モンゴル自治区ジュンガル旗十二連城）で高句麗から派遣されて来た使節に出くわした。同行した黄門侍郎（皇帝に近侍し勅命を伝える職）裴矩（はいく）が，高句麗は元来，周代に箕子が封じられ，漢が4郡を置いた中国の領土であるが，高句麗王は藩属国の礼を守っておらず，先帝も征服を試みたが失敗した，として高句麗攻撃を進言した[43)]。先述の百済や新羅の要請もそれなりの役割を果たしたのであろう，煬帝はこれを受け入れ，翌612年自ら100万余の大軍（『隋書』は，「総113万3800人，200万と号し，輸送隊がこれに倍す[44)]」と記す）を率いて高句麗を親征した。しかし名将乙支文徳（ウルチ・ムンドク）（朝鮮最大の民族英雄の一人とされる）率いる高句麗軍に翻弄され，薩水（サルス）（現在の清川江（チョンチョンガン））の戦いでは致命的な敗北を喫し（朝鮮では「薩水大捷（サルステジョプ）」として知られる），遼水を渡って高句麗に攻め込んだ隋の陸軍30万余のうち遼東城に帰還できたのは僅か2700人に過ぎなかったという[45)]。

この戦争で百済は，高句麗との国境に布陣して隋を支援した[46)]。

〈第 3 次隋・高句麗戦争〉613年煬帝自ら遼東に赴き，隋軍10万が高句麗に攻め込んだ。鮮卑族の副将楊義臣は乙支文徳と 7 戦して 7 勝したが，本国で反乱がおきたため隋軍は撤退した。

〈第 4 次隋・高句麗戦争〉614年行軍総管来護児は水軍を率い奢卑城（現在の遼寧省金県大黒山）で高句麗軍に大勝，平壌に進軍した。高句麗嬰陽王は投降を申し出，煬帝はそれを受け入れようとした。来護児は高句麗を徹底的に叩くチャンスと見て戦闘継続を主張したが，諸将の反対にあい，撤兵した。ただし嬰陽王が入朝の求めに応じなかったので，煬帝は再戦に備え軍備充足を命じた。

隋は，4 度にもわたる高句麗出兵で民衆の生活が圧迫され，反乱や農民蜂起が続発，国力が大いに衰退し，618年滅亡，唐に取って代わられた。それ程の代価を払った隋の高句麗攻撃の目的について『通史』は，①煬帝が

一貫して「遼東の役」と呼んだように，かつての領土を取り戻して全中国を統一すること，またそれとともに，②朝鮮半島の土着国家である新羅と百済を支援することで，これは「中朝友好に対する重大な貢献」だとしている[47]。

〈隋代の交流〉隋王朝は37年（南北朝統一後は29年）という短命ではあったが，『三国史記』によればその間朝鮮から中国への朝貢回数は，百済12回（隋に10回，陳に2回），新羅６回（隋のみ），合計18回，逆に隋から百済・新羅両国に2回ずつ使節が派遣され，公式の往来は頻繁に行われた[48]。またこうした使節の往来に伴う公的な，あるいは密輸に類する貿易も盛んだった。ただし品目や数量は詳らかにしない。

(2) 唐と朝鮮３国

李淵は618年隋恭帝（在位617年－618年）から禅譲されて唐を建国した（高祖，在位618年－626年）。621年新羅・高句麗・百済は相次いで使節を派遣，冊封を受けた。当初唐は，各地の武装勢力への対応に追われ，朝鮮半島を顧みる余裕はなかった。

父を助け，唐建国に大いに貢献した次男世民は，兄の皇太子建成を殺害，第2代皇帝太宗（在位626年－649年）となった。太宗は，内政を充実させるとともに，北方・西方諸国を征服して対外的に勢力を拡大した。太宗の統治期の年号は唯一「貞観」で変わらず，23年という中国の年号としては異例の長さとなったこともあり，中国史上まれな安定期として「貞観（じょうがん）の治（ち）」といわれる。しかし太宗は，隋が高句麗侵攻によっても成し遂げられなかった遼東の回復，これが天下統一の最後の使命だと強く意識することになる。北宋時代，1013年完成の史書『冊府元亀』は，「遼東は古来中国のもの」，「今や中国はほぼ統一され，残るはこの１カ所のみ」（今九瀛大定，唯此一隅）という唐太宗李世民のコトバを記している[49]。

唐開国と同じ618年に即位した高句麗栄留（ヨンニュ）王（在位618年－642年）は唐との関係改善・強化に努め，619年と621年に朝貢，624年には「上柱国・遼

東郡王（公）・高麗王」に冊封された。しかし唐が東突厥を滅ぼした翌631年，高句麗に対し，隋軍将兵の遺体で築かれた戦勝記念碑「京観（けいかん）」の破壊と遺骨の返還を求めたため，高句麗は危機感を募らせ，631年から647年まで16年かけて扶余城（現在の吉林省農安）から渤海に至る障壁を築いて唐の侵攻に備えた。「高句麗千里長城」と呼ばれる。635年吐谷渾，640年高昌が滅ぶと，高句麗はさらに警戒を強め，懐柔のため太子桓建（ファングォン）を人質として唐に送った。高句麗太子の入唐は稀なことで，栄留王の熱意が見て取れる。太宗もこれを多とし，職方郎中（地図・少数民族等を管掌する役職）陳大徳を「迎労使」として柳城（リュソン）（現，平壌）に派遣した。陳大徳の使命には高句麗の実情を探り，また隋軍に従軍して高句麗に留まっている漢人の帰国を促すことも含まれ，十分その任を果たした。なお陳大徳が著わした『奉使高麗記』は，一部を除いて散逸したが，高句麗についての重要な史料とされている[50]。

642年名門家臣淵蓋蘇文（ヨン・ゲソムン）が栄留王を殺害，栄留王の甥を王座に即け（宝藏（ポジャン）王。在位642年－668年）て傀儡とし，自ら大莫離支（テマンニジ）（政治・軍事の最高官職）として権力を掌握した。唐は親唐策を持した栄留王弑逆に憤ったが，643年一旦は宝藏王を「上柱国・遼東郡王（公）・高麗王」に冊封した。

642年百済義慈（ウィジャ）王（在位641年－660年）が新羅を攻撃して旧伽耶諸国の領域を占拠したため，新羅善徳（ソンドク）女王（在位632年－647年）は王族金春秋（キムチュンジュ）（後の武烈（ムヨル）王）を敵対する高句麗に派遣して救援を求めた。しかし高句麗は，新羅に占領された土地の返還を条件として持ち出したため交渉は不調に終わり，逆に高句麗は百済と結んで新羅に敵対，新羅の対唐交通の要衝，党項（タンハン）城（現在の韓国京畿（キョンギ）道華城（ファソン）市）を奪おうとした。そこで新羅は643年唐に出兵を要請，唐は高句麗・百済に新羅攻撃を中止すること，さもなければ唐が両国を撃つと通告した。しかし高句麗は百済とともに新羅攻撃を続行，さらに漠北に使いを送り，トルコ系民族薛延陀（セヤント）と唐との関係を攪乱しようとして，太宗の命令をあからさまに拒否した。

〈唐・高句麗戦争〉かくして644年太宗は対高句麗戦争を発動，自ら陸軍

を率い，水軍とともに高句麗軍を圧倒した。遼東では安市城（アンシソン）（現，遼寧省海城市）の攻防戦が最後の戦いとなり，圧倒的な唐の大軍に対し高句麗軍は城主（韓国では楊万春（ヤンマンチュン）と伝えられ，民族的英雄とされるが，文献上の根拠は薄い）の下に2か月間奮戦して城を守り抜き，冬が近づき兵糧も不足した唐軍に撤退を余儀なくさせた。

太宗は647年，648年にも高句麗に出兵，遼東で勝利を重ねたが，高句麗は謝罪使を派遣してこれをしのぎ，勝敗の帰趨は定まらなかった。649年さらなる遠征を計画したが，太宗の急逝で取りやめになった。この戦争で唐軍15万，高句麗軍20万が戦ったといわれる。

なお643年出兵要請のため来訪した新羅の使節に対し，唐は女王統治を非難し，皇帝の一族を王位に即けるよう横車を押したため，新羅内部で対唐従属派と，金春秋（キムチュンチュ）ら自立派の対立が生じ，善徳女王の廃位をめぐって内乱にまで発展した[51]。陣中で善徳女王が死去したが，勝利した自立派はあえて善徳女王の従妹真徳（チンドク）女王[52]（在位647年－654年）を立てて気概を示した。

自立派とはいえ，高句麗・百済の脅威にさらされる新羅に唐と対立する余地はなかった。648年真徳（チンドク）女王は金春秋・金法敏（ポップミン）父子（後の武烈（ムヨル）王・文武（ムンム）王）を唐に派遣，韓国では「羅唐（ナタン）同盟」とよばれる支援を取り付けた。また唐の文化・制度を学び，帰国後649年唐の官制を取り入れ，翌650年独自年号を廃止して唐のそれを採用した[53]。

百済は，唐から対高句麗戦争への出兵を命じられたが，それを無視して高句麗を支援，新羅を攻めて13の城を奪った[54]。唐は北方異民族の契丹や奚の部隊を動員し，靺鞨（まっかつ）に至っては，一部が唐の援軍となり，他の一部は淵蓋蘇文率いる高句麗軍とともに安市城救援に駆けつけ，唐軍に撃退された。『通史』は，唐は大勝こそしなかったが，高句麗に大きな打撃を与えて新羅への南進の勢いを緩めさせたとしている[55]。

(3) 高句麗・百済の滅亡

唐第３代皇帝に即位した高帝（在位649年－683年）は暫時大規模な高句麗遠征をとりやめ，小部隊による遼東諸城への攻撃にとどめた。しかし655年高句麗・百済・靺鞨連合軍が新羅を襲撃し33の城を奪ったため，新羅武烈王（金春秋。在位654年－661年）の要請にこたえ出兵，658年，659年にも高句麗と戦火を交えた。

660年百済に侵犯された新羅は唐に支援を要請，唐は水陸10万の軍を派遣し新羅軍５万と共に百済と戦った。唐・新羅連合軍は王都泗沘城（現，忠清南道扶余郡）を攻略，義慈王らを捕らえて唐の洛陽に連行し，百済を滅ぼした。唐は熊津・馬韓・東明・金漣・徳安の５都督府とその下に7州・51県を設置，百済人をその長に任じて「羈縻」支配を実行した。その後百済遺民が復興運動を起こし，倭（日本）に人質となっていた王子扶余豊を擁立すべく使いを派遣して軍事支援を要請した。倭の中大兄皇子はこれを受け入れ，軍を派遣した。663年白江（現在の，全羅北道群山市で黄海に注ぐ錦江とされる）河口で，倭軍42,000・百済軍5,000と唐軍13,000・新羅軍5,000が水陸で戦い，唐・新羅連合軍が圧勝，百済は最終的に滅亡した。日本では「白村江の戦い」として知られるが，「白村江」は白江河口の海辺を指す。

盟友百済を失った高句麗に対し，661年唐は35万の軍を派遣，王都平壌を包囲し，新羅は補給の面で全面的に唐を支援した。これに対し高句麗は，淵蓋蘇文の活躍でこの戦いをしのぎ切った。しかし665年淵蓋蘇文が病死すると，息子たちの間で権力争いが生じ，長子淵男生は唐に投降した。唐高宗は淵男生を遼東都督・楽浪郡公等に封じ，唐軍の先導として高句麗に攻め込ませた。668年平壌が陥落，同時に南方で新羅軍に敗れ，高句麗は滅亡した。

(4) 新羅・唐戦争

663年唐は高句麗遠征に際し，新羅に鶏林州都督府（鶏林は，新羅，転じて朝鮮の別名）を置き，新羅文武王（在位661年－681年）を都督とした。

旧百済領では，先に設置された5都督府が，665年熊津都督府に統合され，府治は泗沘城，都督には前百済太子扶余隆（プヨ・ヨン）が任じられた。また668年旧高句麗領には安東都護府を置き，長官である都護は唐から派遣されたが，高句麗最後の宝蔵王は676年「遼東州都督朝鮮王」に任じられた。つまり唐は，百済・高句麗滅亡後も朝鮮を３分して「羈縻」統治を行おうとしたのであり，それは，３国の争いに唯一勝ち残った新羅にはとうてい受け入れられないものであった。

新羅文武王は旧高句麗•百済の反唐勢力を糾合，670年新羅軍は高句麗遺民軍と共に1万の兵力で鴨緑江を渡り遼東に進出し，同時に旧百済領に駐留する唐軍を攻撃した。674年，唐高宗は文武王の新羅王号を取り消し，代わりに弟の金仁問（キムインムン）を冊封，新羅との全面戦争に突入した。しかし唐の戦略重点が西方の吐蕃に移り，文武王が謝罪使を送ったこともあり，唐は文武王の王号を回復，678年対新羅戦争を打ち切った。かくして３国鼎立が始まった562年から110年以上続いた朝鮮半島とその周辺の争乱状態は終了した。

唐の設置した安東都護府は676年遼東城（現，遼寧省遼陽市）に，熊津都督府は翌677年建安故城（現，遼寧省営口市）に移転し，新羅が支配する朝鮮半島の中・南部から唐の勢力は後を絶った。

「おわりに」に代えて

これまで述べてきたように，中朝関係の歴史，その解釈をめぐり，中国と朝鮮では乖離があまりにも大きい。しかし，そのこと自体，中国と朝鮮の関係を大きく特徴づけているといえる。

小論は，文献に表れた中国と朝鮮の関係を７世紀後半までに限って略述したものである。有史以来，朝鮮半島，少なくとも北部には中国（人）の支配が直接及んでいたが，この７世紀後半に初めてそれが終わりを告げたことになる。

中朝関係史を 7 世紀後半で区切るのはいささか中途半端な感は否めない。それでも中朝関係の特徴をいくつか理解することができる。「冊封•朝貢」関係が重要な役割を果たしたこと，特に，中国・朝鮮のどちらか，あるいは両方が分裂している時，自らの正統性を確保するためにはどの選択肢が最適か, という課題を突き付けられていたことが分かる。そしてまた，選択を決定した後，それをどのように実現するか，ということも重要である。小論でそうした実例をいくつも見出すことができる。

中国・朝鮮とも分裂している時期が長く，現在も，中国が台湾（あるいは香港も）問題をかかえ，朝鮮半島も南北分裂状態であって，その点でも過去の歴史に学べる点が多い。また，大国（中国）と小国（朝鮮）の関係を考える上でも，同様のことが言えると思われる。

注

1）中朝関係通史編写組編『中朝関係通史』（吉林人民出版社，1996年，以下『通史』）7 頁～。

2）中国の王朝名の「後漢」「東晋」等も同様で，当時はあくまで「漢」「晋」である。

3）「建国記念日」『世界大百科事典』第 2 版（平凡社，2007年）。

4）『朝鮮建国始祖檀君』（朝鮮外文出版社，1994年）。孫衛国「伝説・歴史与認同：檀君朝鮮与箕子朝鮮歴史之塑造与演変」（『復旦学報：社科版』2008年 5 期）。

5）三橋広夫訳『韓国の中学校歴史教科書―中学校国定国史』（世界の教科書シリーズ13，明石書店，2005年），三橋広夫・尚子訳『検定版　韓国の歴史教科書―高等学校韓国史』（世界の教科書シリーズ39，明石書店，2013年）。伊藤亜人等監修『朝鮮を知る事典』（平凡社，1986年）62頁。

6）中国皇帝が周辺諸国の国王等君長を正式な支配者と認定し，後者が前者に忠誠を誓うべく使者を派遣し貢物を贈る「冊封・朝貢関係」について，中国の『史記』や朝鮮の『三国遺事』等の史書に，周武王が箕子を朝鮮に封じたという記述がある。それに従えば中朝間の「冊封・朝貢関係」は紀元前11世紀前後に始まったことになり，中国では定説になっているようであるが，中国以外では，箕子朝鮮の存在自体が疑問視されている。

7）「古朝鮮」『百度百科』https://baike.baidu.com/item/，2019.5.3閲覧。
8）本来，こうしたことは「国」ではなく，個々の研究者等の説を比較すべきであるが，実際には，例外はあるにせよ，「国」ごとの相違が目立つ。箕子朝鮮の実在説は別として，日本における朝鮮史理解は朝鮮より中国に近い。
9）「慕華」は，中国（の文明）を敬慕する思想的立場，「事大」（「事」は「仕える」の意）はその具体的な実践様式。張月瑩「明前期朝鮮的慕華思想與事大主義」（『赤峰学院学報　漢文哲学社会科学版』第３巻第７期，2016年７月）。
10）尹乃鉉（ユンネヒョン）「民族のふるさと・古朝鮮を行く（上）」（『アジア公論』1987年７月号）。
11）武田幸男編『朝鮮史』（新版世界各国史２，山川出版社，2000年）82頁。以下，『朝鮮史』。
12）東潮・田中俊明『高句麗の歴史と遺跡』（中央公論社，1995年）17頁。
13）『通史』70頁。
14）「驪」は「麗」と同じだが，漢人が蔑視して「馬偏」を付した。東•田中前掲書23頁。
15）同前22頁。
16）『通史』78頁。
17）東・田中前掲書27頁。
18）堀敏一『中国と古代東アジア世界　中華的世界と諸民族』（岩波書店，1993年）103-104頁。
19）同前137頁。
20）『朝鮮史』60頁。
21）堀前掲書138-139頁。
22）『通史』79頁。
23）堀前掲書154頁。
24）同前154頁。
25）同前138-176頁。
26）武田前掲書63頁。
27）『通史』70頁。
28）堀前掲書167頁。
29）『通史』83頁。
30）『三国志』巻三〇／魏書／東夷伝／韓。
31）武田前掲書74頁。
32）『通史』73頁。

33）堀前掲書178頁。
34）武田前掲書86頁。
35）堀前掲書191-2頁。
36）同前192頁。
37）『隋書』巻八一／列伝第四六／東夷／高麗。
38）武田前掲書87頁。
39）『通史』91頁。
40）『隋書』巻八一／列伝第四六／東夷／百済。
41）同前。
42）『通史』91頁。
43）『隋書』巻六七／列伝第三二／裴矩。
44）『隋書』巻四／帝紀第四／煬帝下。
45）『資治通鑑』巻一八一。
46）『隋書』巻八一／列伝第四六／東夷／百済。
47）『通史』92頁。
48）『通史』92頁による。なお同書は，高句麗は中国の少数民族の国だからここには記さないとしている。
49）「帝王部／親征二」。「高句麗」（『百度百科』https://baike.baidu.com/item/高句丽/181650?fr=aladdin，2019年12月 3 日閲覧）による。
50）李爽「陳大徳出使高句麗与《奉使高麗記》」（『東北史地』2015年 2 期）。
51）『朝鮮史』90頁。なお義江明子「新羅善徳王をめぐる"女主忌避"言説」（『日本古代女帝論』雄山閣，2017年）は，後世の女性君主否定論による創作の可能性を指摘した。
52）歴代朝鮮王朝には，真聖（チンソン）女王（在位887年－897年）を加え 3 人の女王がいるが，すべて新羅である。
53）新羅は，第23代法興王の23年（536年）に建元の年号を建てて以来，真徳女王の太和（元年＝647年）まで 7 つの年号を用いた。
54）『資治通鑑』巻一九九／唐紀一五。
55）『通史』99頁。

A Brief History of Sino-Korean Relations

ITO, Kazuhiko

《Abstract》

One of the most pressing challenges for the international community is the nuclear situation in North Korea. China is considered to have the greatest influence over North Korea, so the world expects China to be able to persuade North Korea to abandon its dangerous designs to become a nuclear power. Kim Jong-un, the leader of North Korea, visited China four times alone between March 2018 and January 2019 thus showing North Korea's dependence on China. Nevertheless, North Korea has ignored China's demands and dares not relinquish its nuclear policy.

To understand Sino-Korean relations, it is necessary to study their long history. This dissertation is one such attempt. Although it ends in the latter half of the seventh century, this paper identifies some important and distinct points. The tributary system〈冊封体制〉played a great role. Especially when either China or Korea lost integrity and plural states fought for hegemony, in order to maintain legitimacy, both needed to keep ties with their counterpart. I think this dissertation provides ample examples of this.

Both China and Korea have experienced rather long and divisive times. Even now, China has the Taiwan problem, Korea also has the conflict between north and south. Therefore we can consult history. Besides, in order to better understand relations between a big power and a small power, such an exercise provides useful viewpoints.